

常照

第789号

続龍樹の伝説 ②

《これまでのあらすじ》

南インドのバラモンの家に生まれた龍樹（ナーガールジュナ）は、幼少の頃より神童ぶりを発揮し、長じては全国を一人で回って、天文、地理や道術などすべて身に付けた。同じく優秀な親友三人と「これからは隱身術を身につけて大いに楽しもう」と悪だくみがまとまった。仙術師より、身体を見えなくする（透明人間

になる！）隱身の術を授かった四人は、見えないのをいいことに後宮に忍び込んでやりたい放題、これが王さまに知られることになり、床に砂をまかれるという奇計によつて、足跡を発見され、王さまの背中に身を潜めた龍樹以外の三人は斬り殺され、かろうじて難を逃れた龍樹は「欲は苦しみのもと、禍の根である」と出家者として生まれ変わることを決心したのであった。

《出家の道へ》

家を出て山に入り一つの仏塔（ストウパー）に詣でて、そこで出家受戒した。九十日のうちに三蔵（經―教説、律―戒律、論―注釈の三つ）をすべて読み終えた、さらに他の經典を求めて雪山（ヒマラ

ヤ)に入った。そこには一人の老いた修行者(比丘)がいて、大乘仏教の経典を彼に与えた。これを唱えて教えを受け、その真実の意義を知ったが、まだすっかりは通達することができなかった。さらに他のもろもろの経典を求めて、諸国を周遊した。そして外道(仏教以外の教え)の論師に論戦を挑み、その教義をことごとく論破してしまった。

《龍に導かれて》

ある外道の弟子が言った。「あなたはすべてを知っている人(一切智者)なのに、仏弟子となっている。弟子というのは足りないところを教え導かれる者である。足りないところがあるならあなたは一切

智者ではない」と。龍樹は返事に窮し、恥ずかしさを感じた。そこであやまった慢心を起こして、師の許しも得ずに、教えと戒律を立て、衣すら独自のものを選び、弟子をとろうとした。

大龍である菩薩は、このように思い上がっている彼を憐み惜しんで、引き連れて海に入り、龍宮殿の中で七宝の蔵を開き、宝箱より深奥の経典、無量の妙法を授けた。それを受けて読むこと九十日、意義を通じ理解することが甚だ多く、経典の教えに深く入り、真実の理を体得した。龍はもはや教えることはないと彼を南インドに送り返した。

そこで彼は仏教を大いに広め、外道を説き伏せ、広く大乘を明らかにした。

《呪術の争い》

その頃よく呪術を知る一人のバラモンがいた。かれは龍樹を倒して名声を得ようと欲して、国王に告げて言った。「私は龍樹に勝てます。ぜひ試してください」と。王は「お前は愚か者だ。彼は、聡明さでは日月と光を争い、智慧については聖者の心に並ぶ程なのになぜ崇敬しようとするのか」。そのバラモンは言った「王さまは智者であるのになぜ試そうとしないのですか？ 彼が抑えられるのを見たくないのですか」と。王さまはバラモンの言うことも一理あると龍樹を翌日宮殿に招いた。かのバラモンは後でやってきて、宮殿の前で呪術をなして、広く大きな池を出現させ、池中の千の葉を持つ蓮華の

上にみずから座つて言った「お前は地に座ることしかできないのに、清らかな蓮華の上にいる徳と智慧のある私に対抗しようとするのか」と。龍樹もまた神通力をもつて、大きな牙のある白象をつくり出し、みずからその上に乗つて、池に近づくや、蓮華の上に座るバラモンを象の鼻で締めて高く持ち上げ、地上に放り投げた。したたか腰を痛めたバラモンは、ぬかずいて言った。「私は身のほども知らないで、偉大な師であるあなた様に挑みました。どうか愚かな私を哀れんで、啓発してください」と。

《龍樹の臨終》

さて大乘仏教を広める龍樹を快く思わぬ仏教の集団もあった。その中の一人の

法師は龍樹に対して常に怒りを抱いていた。さてこの世を去ろうというときに、龍樹はその法師に聞いた。「あなたは、私がこの世に永く生きながらえていることを願っているのですか」と。法師は答えて言った。「実は(あなたの長生きを)願っていないのです」と。そこで龍樹は退いて、静かな庵室に入り幾日たつても出てこなかった。不思議に思った弟子が、戸を破つて中を見たところ、セミの抜け殻のようになつて死んでいた。

龍樹の死後、南インドの諸国は、彼のため廟を立て、仏のごとく敬慕している。

(完)

十月の常例布教(ご法話)のご案内

報 恩 講

○期日 十月十三日(日)速夜
十六日(水)日中まで

○時間 晨 朝 午前六時三十分
日 中 午前十時

速 夜 午後一時三十分
初 夜 午後六時

○布教 右記の法要に引き続き

東京教区 群馬組 西福寺

講師 阿部 信 幾 師

○場所 小樽別院本堂

○浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいた
だき、ご聴聞にご来院ください。お待ちして
おります。

○なお、十月十三日より十七日まで報恩講修
行に伴い月忌参詣をお休みさせていただきます
ますので、どうぞ報恩講にお参りください。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四番
FAX (〇一三四) 二九一四〇八番
テレホン法話 二七一一六一番